

# 女性ががん患者 不妊対策に道

医療技術の進歩で多くのがん患者が社会復帰を果たせるようになった。一方、治療の副作用によって卵子が作れなくなることがあり、がん克服後に子どもを産みたい女性患者にとってつらい問題となっている。最近、未婚のがん患者が不妊になる前に卵子を採取して凍結保存し、結婚してからの体外受精に備える動きが広がっている。

「ほらほら、いい子ね」。関西地方に住む主婦、水谷彩子さん(44)は、昨年7月に出産した娘を抱え、満面の笑みで話し掛ける。大阪で働いていた34歳の時、独身の水谷さんは急性白血病を発症した。抗がん剤治療を約半年間受け回復。治療終了後、急いで専門医を訪ねて卵子数個を保存した。

「すぐに不妊にはならなかったけれど、病気が再発してさらに治療を受けたら、どうなるかわからない。年齢も考えての決断でした」。幸い再発はなく42歳で結婚。赤ちゃんを望んだが妊娠せず、不妊治療を始めた。その際、新たに採取した卵子を使った体外受精も試みたが、最終的に妊娠が継続できなかった。若いうちに保存しておいた卵子だった。

「再発して不妊になっても妊娠のチャンスが残っている」と前向きに考えられた。がん治療後の不安な気持ちが随分と和らいだ。水谷さんは当時の心境を振り返る。生体組織を零下196度の低温で急速冷却する「ガラス化法」の開発で、卵子を傷つけずに保存できるようになったのは2000年ごろ。水谷さんは、凍結卵子により出産したがん経験者の国内第1例とされる。母子とも

卵巣近くへの放射線治療では8割以上が不妊を招く。抗がん剤のみの治療はそれより低いとされるが「不妊の恐れは無視できない」(青野さん)。がんが発覚してすぐの治療で問題が生じなくても、再発後の治療で不妊になる事例も多い。治療を終えてしばらくしてか



凍結卵子を収めたケースを、液体窒素の入った保存用タンクから取り出す様子(加藤レディースクリニック提供)

# 広がる卵子凍結保存

## 学会も重要視 21施設で研究

に健康で、同じ境遇の女性にとって明るいニュースとなった。

多くの不妊治療を手掛けた加藤レディースクリニック(東京都新宿区)の青野文仁・研究開発部長によると、骨髄移植や

ら結婚や妊娠を考える患者もおり、卵子が妊娠の適齢期を逃してしまつてことがあるという。

同クリニックでは、依頼を受けると病状や抗がん剤投与のタイミングなどを主治医と相談し、治療に支障がないことを確認して卵子を採取する。希望者のがんの種類は血液がん、乳がん、肺がんなどさまざま。

こうした取り組みは当初、民間クリニックが個別に進めてきたが、現在は日本産科婦人科学会もがん患者の卵子凍結の重要性を認めている。国内

「道が開かれたのだから、医師は患者のがん克服後の人生も考えて卵子保存を選択できるチャンスがあることを伝えてあげてほしい」。白血病治療で受けた骨髄移植の後遺症のために20代で卵子を失った自身の経験を踏まえ、大谷さんは強く訴えている。

### 主治医は説明を

技術的に卵子保存は可能になったが、患者への普及には課題が残る。大谷貴子・全国骨髄バンク推進連絡協議会前会長(50)によると、治療による不妊のリスクと卵子保存の説明を主治医から受ける患者は少ない。治療開始までに採卵する時間は十分あったのに何も伝えられず、後でショックを受けることがある」と大谷さんは憤る。

安心・安全

結核プロジェクト



娘を抱いてほほ笑む水谷さん